

図像に見られる音楽 東地中海地域を中心に

松本 奈穂子*

- I. はじめに
- II. 東地中海地域の図像に見られる音楽
- III. 終わりに

I. はじめに

音楽は時間芸術であり、鳴り響く一連の音の一箇所のみをとどめようとすることはできない。基本的にはどの生演奏も一回限りであり、厳密に全く同じ再生は不可能である。鳴り響く音の保存すなわち録音とその再生を人類が可能にしたのは、つい最近のことにすぎず、現時点では、数千年にわたる人類の音楽の営みを知る縁は記された文言や図像、建造物などに限られる。本稿では東地中海を中心に、こうした図像に見られる音楽記録を概観する。筆者は数年来、世界の音楽に関する知識を学生に教授するにあたり、この地域の音楽図像に言及してきている。東地中海地域は、4大古代文明のうちエジプト、メソポタミアが含まれ、さらにこれらの流れを汲む古代ギリシャ、ローマ文明や西アジアの諸文明が勃興した地域である。ヨーロッパ文明の発展に大きく影響を与えた地域でもあり、現在の様々な楽器のルーツもここに見ることが可能であるため、音楽史を捉える上で極めて重要な地域である。従って、この地域の古代の音楽関連図像を概観することは有用である。同地の古代音楽図像は数多く存在するが、本稿では気鳴、膜鳴、体鳴、弦鳴（リュート属、リラ族、ハープ属）の各分類項目から数点ずつを示すことで、現代にまで繋がる楽器の形態が古代から存在していたことを確認する。

II. 東地中海地域の図像に見られる音楽

表1は、東地中海地域の出土品や建造物などに見られる音楽関連図像例を示している。実際の図像はさらに膨大であるが、特に重要なものを含め若干例を示すことで、同地域の音楽文化の知見を得るための入り口にはなるかと考える。

受理日2019年11月27日
*教養学部芸術学科准教授

表1 東地中海地域出土の楽器および音楽的行動が描かれている図像例

	名称	含まれている音楽モチーフ	製作年代	製作時代
1	象牙製の拍子木	拍子木	BC3300-2778	先史時代<第一王朝、第二王朝> (エジプト)
2	楔形文字のタブレット	ハーブの絵文字	BC3000頃、	ウルク第4期
3	拍子木	拍子木	BC2700頃	ジェムデト・ナスル期 (シュメール、イラク)
4	サッカーラの死者の都のメレカ の墓のレリーフ	踊と演技	BC2778-2160頃	古王国時代 (エジプト)
5		拍子木をもった女性	BC2600頃	メシリム期 (シュメール、イラク)
6	ウル王墓の舟型ハーブ	舟型ハーブ	BC2600-2350頃	ウル第1期
7	ウル王墓の銀張りのリラ	銀張りのリラ	BC2600-2350頃	ウル第1期
8	ラピスラズリ製の印章印影に描 かれた饗宴図	ハーブ演奏図	BC2500頃、	ウル第一王朝期
9	サッカーラの死者の都にあるネ ンケフトカの墓の壁画の一部	弓形ハーブ、笛奏者、カイ ロノミー、イバ踊り、手拍	BC2500~2400頃、	古王国第5王朝
10	動物楽団 (円筒印章)		BC2500-2350頃	ウル第一王朝
11	饗宴図 (円筒印章)		BC2450頃	ウル第一王朝
12	黄金のリラ	リラ	BC2450年頃、	ウル第一王朝
13	ウルのスタンダード	リラ	BC2450頃、	ウル第一王朝期
14	円筒印章印影	縦型の笛	BC2350~2170頃、	アッカド時代
15	凍石製壺の断片	祭儀場面の中の太鼓	BC2100~2030頃	
16	テラコッタ浮き彫り	水平弓型ハーブ演奏図	BD2100-1800頃	
17	拍子木断片		BC2000年紀中頃	ウガリト
18	拍子木断片		BC2000年紀中頃	ウガリト
19		角形ハーブ	BC1950-1539頃	
20	テラコッタ製浮き彫り	二人の拳闘家と共に描かれ た酒杯型の太鼓、シンバル		
21	テラコッタ製浮き彫り	リュート奏者	BC1950-1530頃、	古バビロニア時代
22	貼付文装飾壺	楽師、曲芸師	BC16c頃	古ヒッタイト時代
23	壁画 (一部)	角型ハーブを弾く女性楽師	BC15c頃	
24	円筒印章	ハーブ奏者、儀式図	BC14-12c頃	エラム中王国時代
25	デーベのハトシェブスト女王神 殿南側レリーフの一部	兵士の行進とトランペット	BC1480頃	第18王朝
26	ツタンカーメン王墓のトラン ペット (1)	トランペット	BC14 c	第18王朝
27	ツタンカーメン王墓のトラン ペット (2)	トランペット	BC14 c	第18王朝
28	クレタ奉獻儀	ギター	BC1450頃	
29	デーベの死者の都にある第52号 墓、ナクトの墓の壁画の一部分	双管のオーボエ、リュート、 弓型のハーブ	BC1425-1405頃、	トトメス4世の統治時代
30	デーベの死者の都の壁画の一部	歌手、管楽器、踊り手	BC1425-1375頃、	新王国時代第19王朝
31	デーベの死者の都第51墓の壁画 の一部	シストルム	BC1300年頃、	新王国時代
32	サッカーラの死者の都の墓のレ リーフ	イバ踊りを含む舞踊、杵太 鼓、クラッパ	BC1320-1200頃、	新王国時代第19王朝
33	ヤズルカヤの12神像浮き彫り	行進	BC13c頃	
34	デーベのインヘルカウの墓壁画	ハーブ	BC12c頃	
35	デーベのラムセス3世墳墓壁画 (一部)	9弦ハーブ	BC1150	
36	手の形をした象牙製のまっすぐ な拍子木	拍子木	BC1085-333頃	末期王朝時代 (エジプト)
37	ハトホル礼拝用具：象牙製の拍 子木	拍子木	BC1085-333頃	末期王朝時代 (エジプト)
38	カルケミシュの奏楽図レリーフ	ホルン、大きな杵太鼓	BC1000年紀	
39	太陽神のタブレット		BC870頃	
40	アッティカ式ヒュドリア、壺絵 の一部	輪舞と合唱、堅琴	BC700頃	
41	プロト・アッティカ式ルトロ フォロス (アナラトス)	輪舞、双管	BC700頃	
42	容器	輪舞	BC700頃	
43	アンフォラ	堅琴を持つアポロン	BC7c頃	

44	舞踊図		BC690頃	
45	ニネヴェ北宮殿の浮き彫り	堅琴、太鼓、笛	BC668-631頃	
46	ニネヴェ北宮殿の雪花石膏浮き彫り	リラ、太鼓、シンバルを演奏する4人の音楽家	BC668-627頃	アッシューールパニバル王の時代
47	ニネヴェ、アッシューールパニバル王の宮殿浮き彫り	アッシリアの音楽家：双管葦笛、ハーブ、リラ、双管	BC7C	
48	キージ壺	双管の笛	BC640-630頃	古代ギリシャ
49	クリティアスのクラテル		BC570-60頃	ギリシア
50	キュンバラを手にした少女	スパルタのアルテミス・オルティア聖所出土のブロンズ小像	BC6世紀頃	ギリシア
51	コリントス黒像式ヒュドリア部分	アキレウスの死を悼む哀悼図、リラ	BC570-550頃	古代ギリシャ
52	アキレウスとリラ（壺絵）	リラ	BC560頃	古代ギリシャ
53	女性と少年の祭礼図	アウロス、キタラ	BC540-530頃	古代ギリシャ
54	ディオニュソスとサテュロス	アウロス	BC530頃	古代ギリシャ
55	サルピンクス奏者	サルピンクス	BC520頃	古代ギリシャ
56	アッティカ赤絵式渦形クラテル（頸部）	クロタラ	BC500頃	ギリシア
57	アウロス吹きと踊り子（エピクテトス）	アウロス、クロタラ	BC490頃	古代ギリシャ
58	キタラ奏者（ベルリンの画家）	キタラ	BC490頃	古代ギリシャ
59	クウシ出土の墓石	死者崇拜の演芸・競技	BC470-460	エトルリア（イタリア）
60	サバジオスとキュベレ	アウロス	BC440頃	古代ギリシャ
61	アッティカ赤絵式のペリケ	チューバノン、ディオニュソス関連図	BC430頃	古代ギリシャ
62	ディテュランボス合唱の一場面、鐘状クラテルの細部	合唱、アウロス	BC425頃	古代ギリシャ
63	アッティカ赤絵式の棒状把手クラテルに描かれている絵（壺絵）	リラを弾くオルフェウスと聴衆	BC400頃	古代ギリシャ
64	壺絵図	リラを練習する若い男性	BC5c頃	古代ギリシャ
65	クウシ出土の青銅彫像	カスタネットを使う踊り子	BC5世紀初頭	エトルリア（イタリア）
66	アッティカ赤絵式ヒュドリア	クロタラを手にした踊り子	BC5世紀（第3四半期）	ギリシア
67	アッティカ赤絵式杯	バルビトンを弾くディオニュソスとサテュロスたち	BC5世紀（490頃）	ギリシア
68	壁画（一部）	アウロスを歩きながら奏する音楽家	BC5c初期	エトルリア
69	クウシ出土の青銅彫像	カスタネットを使う踊り子	BC5世紀初頭	エトルリア（イタリア）
70	アルカイオスとサッフォー（ブルゴスの画家）	リラ	BC480頃	古代ギリシャ
71	ヘリコン山のムーサイ（アキレウスの画家）	リラ	BC440頃	古代ギリシャ
72	アポロン祭礼図		BC430頃	古代ギリシャ
73	一対のキュンバラ		BC5-4世紀	ギリシア
74	民数記第10章2節	銀のラッパ	BC4-5c頃	古代ギリシャ
75	ディオニュソスと俳優たち	リラ、アウロス	BC400-390頃	古代ギリシャ
76	宴会図	キタラ	BC4c頃	古代ギリシャ
77	エジプト出土のリンネルに描かれた多彩色の羊毛織物	フォーク・シンバルを使う踊り子	BC4世紀	ローマ
78	クニドスのデメテル		BC340-330頃	古代ギリシャ
79	奏楽図	リュート系の楽器	BC330-320頃	古代ギリシャ
80		ジュリンクス	BC323-140頃	セレウコス朝
81		双管楽器	BC323-140頃	セレウコス朝
82	エピダウロスの劇場	劇場	BC4-3c頃	古代ギリシャ
83	テラコッタ小像	キタラを弾く女性楽師	BC275頃	古代ギリシャ
84	ペルガモンの劇場	劇場	BC2c後半	古代ギリシャ
85	ボルゲーゼの壺	笛、クロタラ	BC2c後半	古代ローマ
86	カスタネットを使う立像	カスタネット奏者	BC2世紀末～BC1世紀初頭	ヘレニズム後期
87	ニサ出土の象牙製リュトン	人物図	BC2世紀	パルティア
88	ニサ出土の象牙製リュトン	人物図	BC2世紀	パルティア

89	テルメズ近郊アイルタム出土のフリーズ	女性シンバル奏者	BC2世紀	バクトリア
90	旅楽師のモザイク画	テュンパノン	BC100頃	古代ローマ
91	奏楽図	リラ	BC1c頃	古代ローマ
92	アキレウスとケイロン	リラ		70 古代ローマ
93	青い壺のレリーフ	エロスが吹く笛	1c頃	古代ローマ
94	闘技場のモザイク画	水圧オルガン、トゥバ、コルヌ	1c頃	古代ローマ
95	トラヤヌスの円柱	ラッパ	107-113	古代ローマ
96	ヘブライの硬貨	リラ	135頃	
97	ヒュドラウリスとコルヌのモザイク画	ヒュドラウリス、角笛コルヌ	2c頃	古代ローマ
98	水圧オルガン型のテラコッタ製ランプ	水圧オルガン型	2c頃	古代ローマ
99	アウェンティヌスの丘のディアナ神殿の床モザイク画	舞踏音楽家と娯楽音楽家	3世紀末	古代ローマ
100	ビシャープールの宮殿の南西部のイーワーン床面を飾ったモザイク画	ハーブ奏者	3c中頃	古代ローマ
101	踊る女	交互連手	4c頃	エトリア

壁画や埋葬品、遺跡からの出土品に描かれたり掘られたりしている、楽器を持つ人々や、舞踊動作を行っていると思われる人びとに注目し、そこから古代の舞踊や音楽理論、楽器の復元などを、多くの研究者が試みてきた。

古代国家の行事は、宗教と密接な関係にあった。前4000年紀以来メソポタミア各王朝からの音楽文化を示す出土品の多くは宗教儀礼の場面を描いたものである。神々との交流をはかる上で、音楽は極めて重要な機能を果たしていた¹⁾。前3000年紀以降には宮廷など世俗世界において儀礼や娯楽に音楽を提供する者たち一現世は無論死後も殉死によって一の存在が確認されている。印章や粘土板、石碑の上に描かれた楽器は実際の楽器発掘品の復元の際の有力な手がかりとなった。

表1の12番目に示す楽器は俗に黄金のリラと呼ばれる。リラとは撥弦楽器の一種で、元来古代ギリシャの弦楽器の1種の名称だったが、弦鳴楽器の1種の分類名称としても用いられる。この場合、リラ（リラ属）とは、胴から突出した2本の腕木の先に横木を渡し、胴から弦を横木まではりわたしたものを示している。ウル第一王朝、紀元前2450年ころの楽器とされる。ウル王室墓地の一つ（墓堅穴 PG1237）から3つの弦楽器が発見されたが、これがもっとも有名である。鍛金技法による雄牛の頭がついていることから黄金のリラという俗称がついている。雄牛は当時の豊饒儀礼と深く関連しており、天候神の象徴としても頻繁に表現され、メソポタミア文明において神聖性を体現し続けていた。シュメールのリラの多くにこの雄牛の頭が共鳴胴の先についている。雄牛の頭の下、共鳴胴の正面にあたる部分は、山羊、ライオン、雄牛などの動物が描かれている貝殻象嵌細工の板で飾られている。共鳴胴の周りは、色の美しい貴重な石でモザイク装飾が施されている。腕木（この垂直方向の二つの柱のような部分）、ここにも石モザイクと象眼とが交互に組み合わされていた。高さは約1.2mと、かなり大きなリラである。このリラが見つかった墓の中には74人の殉死者が葬られていた。6人の武装した男性が入り口付近におり、音楽家は4人で、みな女性であり、3つのリラと1つのシンバルの側に遺骸があった。他に64人の宮廷女官の遺骸が並んでいた。音楽家も女官も、みな一種の晴れ着を

身につけ、装身具も金、銀、ラピスラズリ、紅玉髓などの玉がふんだんに使われていた。全員葬儀の際に所定の位置についたあと、毒あるいは麻酔薬の入った杯を飲んで殉死したとされる。約4500年前のリラであるため、長い年月の間に本体の木の部分はあとかたもなく朽ち果てたが、金や石など装飾の部分が、そのままの形で残っていたため、復元が比較的正確にできた楽器の一つである。このリラの例のように、音楽や舞踊といった表象文化、そしてそれを表現するための楽器などの道具は、宗教や国家など、支配組織の権威をさらに高め、維持し続けるための格好のシンボルに好んで使われることが多々ある。

古代楽器本体の発掘は言うまでもなく大変貴重であるが、同時に奏楽図も当時の音楽シーンを研究する上で重要な図像資料である。リラの演奏図像例の一つに、紀元前2450年頃の、ウル第一王朝王室墓地からの出土品、モザイク製のスタンダードが挙げられる。²⁾ 表面は「戦争」と「平和（戦勝祝賀祭）」という異なった題材を扱っている。全体はラピスラズリをバックとして、貝殻と石灰岩をちりばめて構成されている。

「平和」の場面は3段に分けて描出され、戦勝を祝う宴を催すために、人々がさまざまな物資や食用にする動物を運ぶ場面が、下段と中段に展開していると考えられている。最上段は宴の場面で兜を脱ぎ、腰に毛皮の衣をつけた姿で腰掛け、手にはゴブレットを持つ男たちが描かれている。右手には牛の頭飾りがついたリラを持った演奏家と、歌手と思われる人物が立っている。

リラはギリシャ時代にも数多く描写されており、表1第52図像もその1つである³⁾。トロイアの戦場で倒れたギリシア方随一の英雄アキレウスの死を悼む情景が描かれている。アキレウスの死をめぐる美術表現としては、戦場からその遺骸をアイアスが運び出す場面が好んで表され、本図のような哀悼図はあまり例が無い。女性のひとりが右手にリラを持っているが、演奏されてはいない。この図像おけるリラの意味は、哀悼の場における挽歌などの音楽の存在、喪中の家でのリラの沈黙、アキレウスの所持品であるため副葬品、などの可能性が示唆されている。

ギリシャの例としてもう1点、メロス島出土のアンフォラに描かれた図像⁴⁾にも言及しておきたい。アポロンがリラを左手に持ち、ムーサイと思われる二人の女性を従え、2頭の有翼馬に引かせた馬車に乗って、妹アルテミスの待つデロス島へ向かう様子が描かれている。アポロンは太陽神であるとともに、リラを携えた音楽を司るでもある。彼の右手には紐の端に結びつけたプレクトロン（弦をはじくのに使う道具）が見える。このリラはホメロスに登場するリラと異なり、弦は7本である。それまで一般的だった4本弦からレスボス島のテルパンドロスが7弦を発明したのは本図が作られる直前の時代とされる。プレクトロンもホメロスでは言及されないため、おそらく前7世紀頃に使われ始めたと考えられている。

東地中海地域に同じく古くから存在する楽器にハープがある。ハープの存在は、ウルク第4期、すなわち紀元前3000年頃の、楔形文字のタブレットの上に、ハープの絵文字が残されていることから、当時すでに存在していたとされる。図像に演奏されているハープが表れるのは、先ほどのリラと同じ、ウル第一王朝期、およそ紀元前2500年頃のこと、酒宴の席で演奏されていたり、馬などの動物が演奏している場面を描いた印章が発掘されている。印章上における

音楽を奏でる人びとの図像は、多くの場合、祭儀場面や饗宴場面の中で描かれている。表1の第8図像はウル第一王朝期、紀元前2450年ころのラピスラズリ製の印章印影で、饗宴場面が描写されている。下の段の右端にるのがハープ奏者で、弓なりのハープを演奏する。

表1第19図像は同じハープでも形が異なり弓なりではない。これは角形ハープと呼ばれ、もう少し時代は下って古バビロニア時代、紀元前1950-1539年ころの、このようなテラコッタ製浮き彫りに多く描写される。オスマン朝期の細密画にもこの角型ハープは多数描写されていたが、現在東地中海地域でこのようなハープは用いられていない。日本ではシルクロードを経てたどりついた角型ハープが正倉院に保存されている。

イランのシャープール1世が創建したビシャープールの宮殿の南西部分イーワーン床面を飾ったモザイク画（表1の第100図像）にもハープが見られる⁵⁾。モザイク技法は本来イランには存在しなかったもので、これはシャープール1世がローマ系の職人に命じて制作させたものと考えられている。ハープではなくツィター系になるが、多くの弦を並べてそれをかきならす、という形の楽器で現在西アジアでよく使われているのは、弦を水平に台の上にならべた楽器。アラブ諸国およびトルコではカーヌーン、イランではサントゥールが有名で、非常によく用いられており現在西アジアの古典音楽には不可欠の楽器である。

次に打楽器を概観する。太鼓は古代から様々な種類が存在し、東地中海のみならず様々な地域で発達した楽器の1つである。本体それ自体を打って音を出す楽器の総称を体鳴楽器、膜をたたいて音を出すものの総称を膜鳴楽器という。表1の第15図像は紀元前2100~2030年ころの、凍石製壺の断片で、祭儀場面が描写されている。祈る姿で描かれた2人の人物が右のほうで右を向き、彼らの先にこの破片の中には描かれていないが玉座についた神がいる。彼らの左手が奏楽図で、両側に一人ずつ鼓手のいるおおきな杵太鼓が描かれている。鼓手は右手左手と交互に、太鼓の表側と裏側を叩く。このように儀礼の際には太鼓の伴奏が不可欠だったようである。

表1第20図は古バビロニア時代、紀元前1950~1530頃、ラルサ出土のテラコッタ製浮き彫りである。左側の二人がボクサーで、3番目が酒杯型の太鼓を打つ音楽家、右端がシンバルを打つ音楽家である。メソポタミアでは、レスリングやボクシングなどのスポーツも行われ、このように音楽を伴って行われている図像もいくつか残る。スポーツが音楽を伴うという伝統は、たとえば、イランのズルハネなどが現今の例である。棍棒を用いての身体鍛錬の間、太鼓が拍子を刻む。競技の間ずっとではないが、日本の相撲でも太鼓が用いられる。古代のスポーツは舞踊、演劇、音楽と同様、宗教儀礼と結びつくものが多かったので、音楽の伴奏図は自然である。この例の太鼓ほど大きくないが、今でも西アジア一帯には、ダルブッカ・ザルブ、トンバックなど呼び方は多様だが、酒杯型、鍋型の太鼓が頻繁に使われる。西アジアの音楽図像学の研究者シュタウダーによれば、ヨーロッパのオーケストラで現在使われているティンパニの前身とみなしうる釜型の太鼓が確認できる最初の例である。

ハープやリラと並んで古代からある弦楽器にはリュート系の楽器がある。リュートは15-17世紀を中心にヨーロッパで盛行した東方起源の撥弦楽器の名称で、語源的には西アジアの楽器ウードに由来する。今日では楽器分類法の用語として弦鳴楽器のタイプを表すためにも用いられ、その場合には全世界の非常に多くの楽器がここに含まれる。表1第21図は紀元前1950~

1530年ころ、古バビロニア時代のテラコッタ製浮き彫りとされる。実際に長い棹のリュートが考古学的にはじめて確認できるのは、アッカド時代、すなわち紀元前2350～2170ころであるとされる。演奏者の右には犬、左に豚が掘られていることから、日常生活における奏楽図と推察される。リュートは二つの理由から、一般庶民の間で流行した。一つはリラやハープにくらべて小さくて扱いやすい、持ち運びが楽であるという点である。もう一つは1本の弦でも、指板で弦を抑えることによって、その都度響く弦の長さを変化させ、それによって非常に多くの音を作り出すことができるという点である。この簡便さから、人びとの日常生活において、リュートは非常に愛用されるが、公式の行事や神殿での儀礼が描かれている場面にはメソポタミアではあまり描かれない。そういったときに表れるのは、同じ弦楽器でもリラやハープなど、宗教的意味合いの高い楽器である。このリュート系楽器のうち前述のウードの祖形が、様々な文化との接触の中で、形態を変えつつ、西はヨーロッパ、東は日本にまでたどりつく。シルクロードを経て、日本にも入ってきた楽器の例として、琵琶がある。日本には7-8世紀ごろ渡来したとされ、正倉院に保存されている。いくつかのタイプの琵琶があり、直頸のもの、4弦円形（月琴、^{げんかん}阮咸）のものも、伝来したが定着しなかった。4弦少数柱曲頸洋ナシ型のものがアラブのウード、このウードの祖形が日本で定着し今日まで日本音楽の重要な楽器のひとつとして演奏され続けている。ウードは、アラブ諸国、トルコの古典音楽になくってはならない弦楽器である。

管楽器、つまり息をふきこんで音を鳴らす楽器の例としては、表1第14図の紀元前2350-2170年ころ、アッカド時代の円筒印章印影が挙げられる。下のほうに鹿のような動物が3頭ならんでいる。その真ん中の動物のほぼ真上くらいに、壺がひとつ、さらにその上に、すわっているように見える人物が持っている細長い棒のようなものが縦型の管楽器である。この時期、管楽器が描かれていることは非常に少ないので、貴重な資料といえる。トランペットも古代より用いられてきた重要な気鳴楽器の1つである。ツタンカーメン王墓のトランペットは当時の楽器が現存する貴重な発掘品の例である。奏楽用、信号用と、トランペットは古代から様々な役割を果たしているようである。

紀元前668～627年ころ、アッシュールバニパル王の時代の、ニネヴェ北宮殿の雪花石膏浮き彫りに描かれている4人の音楽家（表1第46図）は2人ずつ、対面で向かいあっている。左に手前側に杵太鼓という太鼓の一種、それからその奥にリラをひく人が表される。右の手前の人もしラをひき、奥の人物はシンバルを打ち鳴らす。向き合ったまま、お互い前後左右に動きながら、踊っているというのが、こうした図像を主に研究する音楽研究者たちのこれまでの見解である。

エジプトでは、多くの墓の中に壁画がある。エジプトもメソポタミアも、死後の世界においても、現世と同じ生活ができるようにと、願うのは同じであり、殉死がなされていた。しかし、後にエジプトでは人物のシンボルとして人形をいれたり、壁画にこうあってほしいという願いの情景を描くという方法がとられた。おびただしい壁画の数々から、当時の慣習などを垣間見ることができる。エジプトはその長い歴史の中で、紀元前1730-1580年頃、中王国時代の第15王朝から17王朝の頃、ヒクソスによりエジプト征服がされた結果、政治経済生活に大きな変化

があった。そのとき以降、小アジアの国々からの様々な楽器がエジプトに流入したとされる。この小アジアとの文化の交流の結果、古い時代のエジプトの静かで落ち着いた音楽や踊りは、動きのある鋭いものになったとする説もある。

紀元前2500-2400年頃、古王国第5王朝のサッカーラの死者の都にあるネンケフトカの墓の壁画の一部には、弓型のハープが描かれている（表1第9図像）。かなり大型のこのハープの形は、エジプトでよく使われたものである。ハープ奏者の前にカイロノミーで合図を出している人物が4人、管楽器奏者が2人いる。カイロノミーは手指の様々な形や挙げる角度などによりある特定の音を表して、演奏者に指示を与えている。親指と人差し指をあわせたり、他の指をあわせたり、手の指をすべてのばしてあわせた形で合図を出したり、いろいろな指の形がある。この、指の形と腕の位置によって、合図を出している音程が変わってくる。音の高さを伝えているという意味で、これは楽譜のひとつとしてみなすこともできる。

下の段では踊りの情景が描写されている。右端の二人が手拍子で伴奏をし、残りの5人が、両手をあげて踊る。これはイバ踊りといわれる。この頭上で曲げた両腕で、牛の角を象徴しているともいわれ、イバ踊りが、女神ハトホルへの信仰を表した舞踊である、という説もある。

新王国時代、紀元前1300年ごろ、テーベの死者の都第51墓の壁画の一部に描かれている3人の女性は、大きく濃い扇形のようなものと、小さな丸い形のものを手にもつ（表1第31図像）。扇のようなものは、植物の束である。蓮の花など、沼地に咲く植物を愛する女神ハトホルをたたえるために音を立てて振るという習慣がエジプトでは古くからあり、新王国時代でも行われてという。一緒にもっている、丸い形のようなものが体鳴楽器の一種シストルムである。握り手の上が、まっすぐのパイプをユー字型にひねったような形、その口の閉じた逆U字形の中は空洞になっていて、その真ん中に、3本くらい横に棒が走っている。これは動くことができた、いろいろと金属などの輪がついたりして、振ることで、互いにぶつかりあって音が出る。エジプトでは、シストルムは、宗教儀礼時に祭司用のものが使われた。

表1の第32図像は太鼓の踊りの事例で紀元前1320-1200年ごろ、新王国時代第19王朝、サッカーラの死者の都の墓のレリーフである。腕をあげ絵の右から左へと歩いてくる祭司たちに対して、太鼓を演奏する踊り子たちが左側に描かれる。この太鼓は小型の円型杵太鼓である。右の祭司たちが踊っているのは、前の図でも見たイバ踊りである。このふたつのグループの間に、軽く湾曲した2本1対のクラッパーを打ち鳴らしながら、腰をふり、膝をまげ、片手を上に、片手を下にして踊っている踊り子が二人見える。

表1の第30図像は当時の娯楽音楽の情景を描写している⁶⁾。図像では下の段に、音楽家たちと、踊り子が描写されている。頭上の円錐上のものは、良い香りをつけた脂の玉で暑さでだんだんとけていき、衣服の上に良い香りと脂とが、しみこんでいつている。音楽家のうち、3人は手拍子を取りながら、歌を歌う。右端の音楽家は双管の楽器を吹く。踊り子二人は現在のベリーダンスのような踊りを踊っていたのではないかと、いう説がある。手前にいる少女の組み合わせられた手が、ベリーダンスなどで両手を重ねて指を鳴らすしぐさに似ているというのも、その根拠の一つである。添えられている歌のテキストが、水による豊饒、毎年 Nile の氾濫、エジプト人の新年祭について書かれていることから、仮にここで描かれている舞踊がベリーダ

ンスに近いものであるとするならば、ベリーダンスの本来の意味が豊饒祈願とする解釈を強めることにもなるとされる。

トトメス4世の統治時代、紀元前1425-1405年の、テーベの死者の都にある第52号墓、ナクトの墓の壁画の一部分の奏楽図（表1第29図像）も大変有名である。左から、双管の楽器、リュート系弦楽器、そして、エジプトでよく使われている大きな弓型のハーブが描かれている。一つ一つの楽器がフレットや指穴の位置など非常に鮮明に、かつ細部まで、よく描かれていることから、古代の音楽の音組織を調べるための非常に貴重な図像になっている。

紀元前700年ごろ、アッティカ出土のアッティカ式ヒュドリアの一部には初期ギリシアの壺絵で、もっとも基本的な図案である人物図が描かれている（表1第40図像）。輪舞で手をつなぎ、飾枝をもった若者もしくは乙女からなる二つのグループが踊っている小合唱隊の絵の一部である。バルカン、西アジア一帯で、このような連手の踊りは、現在でも非常に多く見られる。トロイヤスミルナ（現在のイズミル）など現在のトルコの西側はこのように古代ギリシャ時代の重要な文化圏でもあり、スミルナのホメロスのように、非常に高名な詩人や哲学者なども数多く出ている。ただし、ギリシア本土とトルコ側は、文化的にまったく均質だったわけではなく、たとえばトルコ側の土着信仰であった地母神キュベレ信仰の存在とそのギリシア本土への伝播など、地方地方に特徴があった。音楽的にも区別があり、リラで演奏される荘重で落ち着いた音楽はギリシャ本来、ティンパノンで演奏されるけたたましく騒がしい音楽はアジアから、という認識があり、それが様々な神話にも表現されている。この図像で小合唱隊を率いているのはリラ奏者である。リラ演奏と輪舞は、いくつかの前8世紀の幾何文様様式の壺絵が示すような、ギリシア人の音楽生活を題材にした描写の対象である。管楽器のアウロスが合唱隊を先導する図像が登場し始めるのは、リラよりも半世紀ほど後のことである。

紀元前440年ごろゲラ出土のアッティカ赤絵式の棒状把手クラテルに描かれている図像（表1第63図像）は、中央でオルフェウスがリラを弾いており、その両側でトラキア人が彼の音楽に聞き入っている光景である。オルフェウスはギリシャ神話に出てくるリラの名手であり、ハデスとの約束を破って妻エウリディケを冥界から取り戻すことに失敗し、最後はディオニュソスの信者たちに八つ裂きにされ殺されるという悲劇の主人公でもある。彼ほどの名手が弾くリラの音に引き込まれ熱心に聞き入っているという、聴衆としての音楽行動への参加を、この絵は表現している。リラは前述のように太陽神アポロンの楽器とも言われ、古代ギリシアでは非常に神聖視され、常に他の楽器よりも格が高いとされた楽器である。

ヒッタイト時代の発掘品にも音楽描写がある（表1第22図像）⁷⁾。ボアズキョイから北西100キロの位置にあるイナンドウックテベの遺跡は1966年の調査で神殿が発見され、そこからハットゥシュリ1世王に関係する粘土板文書が出土したことから、紀元前16世紀ころの古ヒッタイト時代に属することが明らかになった。

この神殿の一室から発見された全面を貼付文装飾によって覆われる土器にはさまざまな儀礼の場面が描かれている。その中に、リュート系楽器や円型棒太鼓を奏する楽師の姿も見える。この時期の奏楽図は少ないため、貴重な資料の1つである。

双管の楽器は、前述のようにエジプトの壁画にも見られるが、ギリシャ・ローマ世界におい

でも頻繁に登場する重要な楽器である。表1 第図像⁸⁾ もその一例で、紀元前7世紀の容器に描かれた舞踊図である。男女交互の輪舞で、男は裸体と顎鬚^{あごひげ}により、乙女は長く波打つ斑点模様の衣によって、描き分けられている。彼らは花のついた枝を手にもち、ペアを組んで互に向かい合って動いている。彼らの中央に双管の気鳴楽器を奏する楽人が描かれている。同図はギリシア時代におけるこの吹奏楽器の出現を証言している最古の品の一つとされる。古代ギリシャのある古い伝承では、フリュギア（小アジア、今のトルコのアジア側西北部、だいたいマルマラ海南部一帯を指す地域）の半神が、アウロスの発明者であるとしており、ホメロスでもアウロスはトロイア側の楽器として描写される。一般的に知られているのは、比較的新しいほうの伝承で、知恵と戦の女神でもあり、アテネ市の守護神であるアテネが、英雄ペルセウスがゴルゴン姉妹の一人メデューサを殺したときに、ゴルゴンたちがあげた悲鳴を模してつくったと言う説である。

膜鳴楽器のうち古代ギリシャで頻繁に登場するのはティンパノンである。＜クレオフォンの画家＞作紀元前430年頃のアッティカ赤絵式ペリケに描かれたヘファイストスをオリュンポスへ連れ戻すディオニュソスはその一例である。ディオニュソスにまつわる音楽の領域には、ティンパノンすなわち杵太鼓も現われる。この＜クレオフォンの画家＞作の壺絵でこの楽器を叩くのは、ディオニュソスの供をするマイナスである。ティンパノンは今日の西洋音楽におけるタンバリンや西アジアで多用されるデフやレックなどの円型杵太鼓にきわめて近い楽器である。多くの場合木製と思われる円型の杵の両側に獣皮が張ってある。ティンパノンとタンバリンの違いは、タンバリンでは片面にしか皮が張ってない点で、ティンパノンは両面太鼓である。ティンパノンの膜面には幾何学模様や植物模様が描かれていることもよくあり、特に比較的後の時代の華美なスタイルの絵や南イタリアの壺絵に見られる。初期イタリアのある渦巻きクラテルの絵には、ティンパノンの片面に、おそらく厄除け用と思われる黒い手の装飾が描かれている。膜面に文字や図柄を施す伝統は現在もあり、例えばトルコのメヴレヴィー教団で用いられるデフには始祖メヴラーナーを讃えるカリグラフィーが教団特有の長い帽子のデザインとして膜面に施されていたりすることがある。ティンパノンは前5世紀になってようやくアッティカの壺絵に登場する。文献資料も同様で、ホメロスの詩やアルカイック期の叙情詩人の作品にはティンパノンは現われない。この楽器は、まずピンダロスやヘロドトスに登場する。エウリピデスによれば、ティンパノンはキュベレの息子とされるコリュバンテスによって発明されたとされることから、この楽器とキュベレ崇拝との関連を見て取ることができる。ティンパノンはディオニュソス神やアフロディテ神を賛えるためにも打ち鳴らされる。ティンパノンは前5世紀にフリュギアのデメテルないしキュベレ崇拝が伝播するにつれて、ギリシアに広まったのである。古代ギリシアの重要な楽器のうち、アウロスとティンパノンは、トルコ側から伝播したらしいということがわかる。

オルガンも東地中海地域で誕生した重要な楽器で、パンパイプス（シュリンクス）から派生したとされている。アレクサンドリアの技師クテシビオス Ktesibios (ca.300-250BC) は水压を利用したヒュドラリウスを発明したとされ、ローマ時代には競技会や祭典などに広く使用されている。風圧オルガンの最古の例は、ユダヤ立法学者の口伝や解説を集めたタルムードに現

れるマグレーファ magrepha とされる。ファーマーによれば、これは携帯可能な小型オルガンで、ユダヤ教の会堂内で使用されていた。キリスト教会にとりいれられた最初の確実な資料は666年ごろで、教皇ウィタリアヌスが会衆の歌唱を指導するためにオルガンを設置している。

他の重要な出土品としては、既に言及したものもあるが、鈴、ガラガラ、拍子木などの鳴り物などが挙げられる。表1 第66図像は紀元前5世紀ごろの、アッティカ赤絵式ヒュドリアに描かれた絵である。クロタロンという拍子木をもった踊り子が中央に描かれている。左に、双管の縦笛アウロスを吹いている女性が描かれている。アウロスはリラと同様、古代ギリシャで非常によく用いられた楽器の一つで、特に祭儀には欠かせなかった。

古代の劇場も、往時の音楽を含めた諸芸能を知る上で重要である。一例であるペルガモンの劇場（前2世紀後半、安山岩、トルコ、ベルガマ）がある海拔300メートルを超える山の頂に建設されたペルガモン市はアッタロス朝時代（前3世紀初め～前2世紀末頃）にヘレニズム文化の重要な拠点の一つとして全盛期を迎えた。同劇場は前2世紀後半にアクロポリスの西側急斜面を利用して平原を見渡せる絶景地に建設されている。舞台建築の背後にはドーリス式列柱が立ち並ぶ長さ約250メートルの長大なテラスが広がり、その北端にはディオニュソス神殿があった。収容人員は約1万、観客席は80列に及び、最上段とオルケストラの高低差は36メートルあったという。ヘレニズム時代は恒久的な舞台建築を造らず、必要に応じて木製の仮設舞台を据え付けたため、ふだんは観客席から平原と下の街の景色を楽しむことができたという。

Ⅲ. 終わりに

本稿で触れることができたのは、古代東地中海地域の表演芸術を今に伝えてくれる様々な図像や発掘品、建造物などのごくごく一部に過ぎない。しかしながら、とりあげた事例の一つ一つが関連文化圏であるヨーロッパに受け継がれ、欧米の音楽文化が全世界に強い影響を与えている今日、多くの人々にとって既知の楽器の源となる音楽文化がどのようなものであったかをより深く理解する取り組みは今後さらに必要になると考える。

注

- 1) 音楽の宗教的機能は、現代でも様々な宗教において確認できる。
- 2) 表1の第13番図像。ウル第一王朝時代 前2500年頃 イラク ウル王墓 PG779出土 木、貝殻、赤色石灰岩、ラピスラズリ、高20.3cm、幅48.3cm、ロンドン、大英博物館所蔵。
- 3) ダモスの画家：アキレウスの死を嘆き悲しむネレイスたち（コリントス黒像式ヒュドリア部分）、前570-550年頃、チェルヴェテリ出土、陶器、高さ45.1cm、パリ、ルーヴル美術館所蔵。
- 4) 天駆けるアポロン（高さ95cm）、前7世紀。アテネ国立博物館所蔵911。
- 5) ハープを奏でる女、3世紀中頃、イラン、ビシャープール出土、モザイク、75×117cm、ルーヴル美術館所蔵。
- 6) 第18王朝、紀元前1425-1375年ごろ、テーベの死者の都の壁画の一部で、大英博物館所蔵。
- 7) 貼付文装飾付き壺、前16世紀、トルコ、İnandiktepe 出土、粘土、高82cm、径46cm、アンカラ、アナトリア文明博物館所蔵。
- 8) アナラトスの画家 プロト・アッティカ式ルトロフォロス、前7世紀初頭、陶器、高さ80cm、

パリ，ルーヴル美術館。

参考文献：

Subhi Anwar Rashid 1984 *Musikgeschichte in Bildern: Mesopotamien*, VEB Deutscher Verlag für Musik Leipzig.

Egon Wellesz (ed.) 1969 (1957) *Ancient and Oriental Music*, London: Oxford University Press,.

Farmer, H.G. *The Organ of the Ancients*. 1931.

Günter Fleischhauer 1977 *Musikgeschichte in Bildern: Etrurien und Rom*, VEB Deutscher Verlag für Musik Leipzig.

Hans Hickmann 1975 *Musikgeschichte in Bildern: Ägypten*, VEB Deutscher Verlag für Musik Leipzig.

Max Wegner 1970 *Musikgeschichte in Bildern: Griechenland*, VEB Deutscher Verlag für Musik Leipzig.

三宅裕 2000 「世界美術大全集 東洋編 16 西アジア」小学館